疾患である。気管支鏡検査所見として気管支粘膜下血管の網目状増生。気管支鏡検査では肺胞の増加やリンパ球の増加、CD4/8比の上昇を認める。さらに気管支鏡検査で認められる乾燥性類上皮芽腫を認めているいわゆる【目的】当院での症例の診断状況とその傾向を調べるために以下の検討を行った。

19. 当院における肺野末梢型軽微陰影に対するCT透視下気管支鏡検査の現状【研究】伊藤和信、長尾洋雄、松村信司（国立病院機構新潟医科病院呼吸器内科）
胸部CT発見末梢型軽微陰影の診断に対するCT透視（ガイド）下気管支鏡検査を、当院では2000年4月から極細気管支支枝を主体に迅速気管支検査を併用している。検査対象はCTフィローや生検が必要と判断された肺野末梢病変で、隔間気管支検査が不十分またはその近辺に達しているX線透視下生検困難例で、胸腔下気管支末梢型軽微陰影が疑われるものはCTフィローや生検を施行した。施行症例数97例、99病変、施行回数101回、検査時間6.36分。検査時間の平均15分。CT透視下気管支鏡による生検処理を全て行う。97例中101回、48回（48%）、検査時間は35回（35%）であった。97例中最終診断が肺癌48例、良性疾患37例、未診断フォーマン12例で、肺癌者のCT透視下気管支鏡検査確定率は48例、51回CT-BF検査中、25回（49%）で、残りの23例はCT-BF検査中で診断が確定された。良性変化率は37例、13例、17例（45%）であった。マチクテストライツCTにより、気管支鏡検査前後に気管支鏡の診断が不確実な症例が認められるため、気管支鏡検査の有用性を検討するために、CT透視（ガイド）下気管支鏡検査の適応と問題点について検討する。

20. 胸腔鏡検査で原発癌と確定診断できた1例杉本幸弘、千塚博、中村慎一、内村明光（熊本市民医会熊本地域医療センター呼吸器科）

【症例】50歳男性、右胸水貯留を当センター受診、胸腔鏡検査でadenocarcinoma cellが認められた。胸部CT上無気陰影を指摘できず、腹部CT・骨盤内MRI・FDG-PETで骨盤内腫瘍を同定が困難であるため、軟性気管支鏡検査を用いて気管支鏡検査を施行した。右肺上野に1つの小陰影で境界不明瞭、動的であると結節性変化が認められ、病理組織検査はadenocarcinomaで無発癌としても矛盾しない所見であった。【まとめ】胸腔鏡検査で肝癌と確定診断できた1例を経験したので報告した。コープスによる盲目的生検の確証率は病変の分布密度に依存しているので本症例のように病変が極めて少ない場合は診断できない。そこで内科医でも簡単に施行可能な新局所麻酔下の胸腔鏡検査を考慮することが重要であり、呼吸器内科医が最も使いたい軟性気管支鏡を用いることがより多くの施設で施行可能です。

21. 胸水貯留で発症し胸骨下胸腔鏡検査で診断に有用であった肺癌の1例藤野健二、松本幸弘、古川秀絵、千塚博（熊本市民会熊本地域医療センター呼吸器科）
胸水貯留で診断に有用であった肺癌の1例で報告する。症例は70歳男性で、2006年3月中旬より労働時気切れ、顔色の変化を認める。右胸水を確認のため4月に当センターを紹介受診した。胸部X線及びCT検査で、ADAS11.34 IU/mlと腫瘍性膿液が疑われたが、2回施行した細胞診はともに陰性であった。ドレナージ後も胸腹部CTで明らかな肺内異常を認めないため、胸骨下胸腔鏡検査を施行した。胸腔鏡検査では微細な結節の結節をびらん性に認め、生検により肺癌を認め、形態より肺癌と疑われた。CTで肺門部結節のため血腫を疑い直視下に病変を認めなかったが、FDG-PETでは、首部位にSUV=5.5の結節状ブロードを認め、診断確定処理、CT、MRI、注視所見から肺癌と診断した。肺癌に対しては、Hypotonic CDDPで肺隔膜癌を治療を行い、当センター消化器内科にて全身化学療法FOLFOXを施行している。原発性肺癌は比較的まれで、診断が困難であると言われている。今回我々は、胸水貯留し、その診断に胸骨下胸腔鏡検査が有用であった肺癌の1例を経験したので文献査元を含め報告したい。

22. 胸骨下胸腔鏡検査により確定診断が得られた転移性肺癌の1例荒木真市、鳥取市華、原田晴大、高島洋一、中西洋一（九州大学大学院医学研究院病態疾患研究所）
胸骨下胸腔鏡検査が、転移性肺腫瘍の確定診断に有用であった症例を経験したので、画像所見を含め報告する。症例を28歳の男性で、1999年に上葉原発（lymphoepithelioma、TNM0、Stage IV）の診断を受け、当院耳鼻咽喉科で放射線治療、その後術後、数回の化学療法を受け完全覚解に至った。以後外来受診を自己中断していた。2005年1月頃より左側のしびれ、呼吸困難、咳を自覚するようになったが放置していた。同年8月より自覚症状が悪化し、左胸部痛が出現したため、当院耳鼻咽喉科を受診した。胸部X線、胸部CT